3　音響分析により発音機能の改善を評価した部分床義歯症例

○松本　崇臣[1)]，野村　章子[2,3)]，丸山　　満[2)]，伊藤　圭一[2)]，
大平　芳則[4)]，塩田　孟紀[5)]

([1)] 歯科技工士学科専攻科生体技工専攻６回生，[2)] 歯科技工士学科，[3)] 附属歯科診療所，
[4)] 歯科衛生士学科専攻科保健言語聴覚学専攻，[5)] シンワ歯研)

【はじめに】部分床義歯による補綴治療の目的には，咀嚼機能や審美性，発音機能の維持と回復がある．しかし，日常臨床における発音の評価は，診療従事者の経験と患者の主観的評価に依存していることが多い．そこで，本学附属歯科診療所ことばクリニックと連携するチームアプローチで，義歯設計に患者の意見を取り入れ，音響分析により発音のし易さに配慮した症例を報告した．

【症例】患者は義歯不適合と“し”を含む単語の発音に違和感を訴え，義歯新製を希望した70歳女性であり，口蓋部を床で広く被う旧義歯の装着を敬遠していた．そこで，装着感への配慮から，大連結子の走行位置や形態が異なる３条件の咬合床を製作し，患者から装着感と発音のし易さについて意見を聞いた．

その結果，「装着感と発音が良好」と答えた中パラタルバーの形態を設計に反映し，厚さ1.5mm，幅10mm，12% Pd合金を用いて十分な強度を確保し，連結装置を製作した．

患者は新義歯に対して発音のしやすさと食事のおいしさに大変満足していた．また，装着後に言語聴覚士による構音検査を行い，スペクトログラムによる音響分析を実施した．その結果，旧義歯装着時の雑音成分が消失し，有歯顎者に近似したデータが得られたことから，発音機能の改善を明確に確認できた．

【まとめ】

・大連結子形態を取り入れた咬合床を用いることにより，義歯設計の十分な検討ができ，装着感と発音機能の改善につながった．

・補綴治療に言語聴覚士が加わることで音響分析が可能であった．

・通法の義歯治療にとどまらず，設計時の咬合床による評価と，術後の音響分析による評価を経験したことから，歯科医療チームが連携することの重要性を学んだ．

4　ことばクリニックと他機関との連携について

○入山　満恵子[1)]，大平　芳則[1)]，青木　さつき[2)]

([1)] 歯科衛生士学科専攻科保健言語聴覚学専攻，[2)] 附属歯科診療所ことばクリニック)

【緒言】今年10月で１年を迎えた明倫短期大学附属歯科診療所ことばクリニックは，主に発達上何らかの問題を持つ子どもとその保護者の不安や悩みを受けとめ，今何ができるのか，更に予後について言語の専門家としてアドバイスし，かつ保護者と対等な立場で子どもを育むという役割を担っている．しかし，毎日通うという性質の施設ではないため，１回の診療で得ることができる情報は限られている．そのため保護者からの情報に加え，その子どもが日々通っている教育機関等からの情報が，子どもを支える上で重要となる．そこで，この１年間で他機関と連携した事例を取り上げ，その利点および問題点について言及した．

【事例】新潟大学教育人間科学部附属養護学校小学部に通う２名（５年，６年）．クリニックには約月に１回通ってきており，それぞれコミュニケーション確立を目指した指導が中心である．この２名に関して，学校の担任と学期始めおよび学期末を中心に訪問，メール等で連絡を取り合い，学校での学習目標とクリニックでの指導内容について相互に了解し，互いの指導内容を活かせるプログラムを検討した．また，時には保護者も交え３者で話し合い，意見交換を行った．

【利点と問題点】連携の利点として①子どもの指導内容に矛盾が生じない②一人の子どもを複数の視点で支えることがより充実した教育を生み出す３保護者が参加することで不安や疑問が軽減し，信頼関係が強まる④クリニックでの活動を，広く知ってもらうことができることなどがある．

一方，問題点として様々な制約（職場，時間等）があり負担は大きいことが挙げられ，また複数の機関で個人情報を扱うことになるため，注意が必要である．しかしながら，連携の果たす役割は大きく，クリニックから積極的に外部に働きかけることで指導内容がより一層充実するようシステムを確立していく必要があると考える．